

メッセージアウトライン マタイの福音書8：5～13 「逆転する祝福」

[5-6]「イエスがカペナウムに入られると、一人の百人隊長がみもとに来て懇願し、

『主よ、私のしもべが中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます』と言った」

「カペナウム」はイエスが伝道の拠点とされていたイスラエル北部のガリラヤ湖の西岸に位置する町である。「百人隊長」は当時イスラエルを治めていたローマ帝国の軍隊の百人の兵士の上に立つ隊長であり、ローマ軍の一個師団は六千人で構成されており、それぞれ百人を束ねる百人隊長が六十人、千人を束ねる千人隊長が六人いた。カペナウムにはそのうちの百人が駐在して治安を守っていたと思われる。

イエスが山上の説教を終えて山から下って来られて最初になさったことは8：1～4に書かれているツァラアトに冒されている人の癒しであったが、そのすぐ後にこの出来事が起こったのである。彼はイエスのみもとに来て一つのことを懇願した。それは彼のしもべが中風のため家で寝込んでひどく苦しんでいますで、どうか来てくださって彼を癒してくださいという願いであった。「しもべ」とは部下の兵士のことではなく、彼の家で仕えている召使いのことである。「中風」とは脳内出血などによって体が麻痺し、半身不随などになる病気のことである。しかし、並行箇所の子ルカの福音書7:1～10ではイエスのみもとに来たのは百人隊長から送られてきたユダヤ人の長老たちであり、彼らは百人隊長が自分たちユダヤ人を愛し、また自ら会堂を建ててくれたことなどの功績を伝え、彼は「あなたにそうしていただく（しもべを癒していただく）資格のある人ですと熱心に願い、その人格を保証した。彼らは百人隊長が周りの人たちにいつも心を配る人であり、イエスなら必ず癒すことができる方であると確信していたのである。

この百人隊長はローマ人であるのでユダヤ人たちから見たら異邦人、異国人である。すなわち彼らの先祖アブラハム、イサク、ヤコブ以来の神の祝福を受け継ぐ民族ではなく、神の選びの外にある者であり「ユダヤ人を迫害する者、悪者、神にさばかれて滅びに行く者」と思われていた。そのようなローマ人の百人隊長がなんとユダヤ人の長老たちから太鼓判を押されるほどの推薦を受けるのは異例のことであり、これはその人格と善行がユダヤ人の

間で広く知られていたからであろう。彼はユダヤ人のために会堂を建ててくれた(ルカ7:5)人物でもあるので、自らユダヤ教に改宗していたのかもしれない。

[7-9]「イエスは彼に『行って彼を治そう』と言われた。しかし、百人隊長は答えた。『主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒されます。と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。わたし自身の下にも兵士たちがいて、その一人に〔行け〕と言えば行きますし、別の者に〔来い〕と言えば来ます。また、しもべに〔これをしろ〕と言えば、そのようにします。』」

この箇所もやはり並行箇所のルカ7:6~8ではイエスの一行が百人隊長の家からあまり遠くないところにまで来たとき、彼は友人たちを使いに出して同じ内容のことを伝えている。

「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒してください。……」

「ただ、おことばを下さい」…マタイもルカも全く同じことばが使われている。この謙遜な、しかし確信に満ちた百人隊長のことばはまさに彼の信仰から出たものであった。

自分は異邦人であり、イエスはユダヤ人であるので、イエスに「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません」と謙遜に伝えたのである。しかし、彼のことばはそれだけで終わってはいない。彼は続けて「ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒されます」と信仰に立った発言をする。これは大変な発想、大変な信仰である。その信仰の基礎となったのは彼のローマの軍人としての生き方の中にあった。百人隊長の彼の命令一下、兵士たちはその通りに実行する。百人隊長は百人の部下を持つ指導者であり、自らも千人隊長、総督、皇帝といったさらに上の権威者をいただく者としてローマ帝国の権威の下にある人物であり、それゆえ彼は権威の力をよく知っていた。

彼はイエスのことをよく知っていた。イエスはガリラヤ地方を中心に弟子を集め、悔い改めと神の福音を宣べ伝え、群衆や弟子たちに山上の説教において真の神を信じる信仰者の生き方について教え、数々の奇跡や病人の癒しをなし、力ある、権威あることばを語られた。これらのことからイエスの評判は人々の口から口へと語り継がれ、野火のように広がっていき、イスラエルに大預言者あらわるとか、神がその民を省みてくださったなどと言われていた。これらの出来事をカペナウム駐留のローマ軍の百人隊長たる人が知ら

ないはずがない。彼はこの大預言者、神の権威を持ったお方ならば、その権威あることばによって必ず自分のしもべを治してくださると信じたのである。

神のことばは、神のみこころを確実に成就する権威ある力である。→イザヤ55:10~11、詩篇107:19~20

[10-12]「イエスはこれを聞いて驚き、ついて来た人たちに言われた。『まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。しかし、御国の子らは外の暗闇に放り出されます。そこで泣いて歯ざしりするのです。』」

この百人隊長の信仰はイエスを驚かせた。神の選びの民であるイスラエル人であれば信仰があっても当然であるが、その信仰が異邦人にもあった、しかもイスラエル人のうちのだれにも絶対に見出せぬほどの立派な信仰であったということ、それがイエスの驚かれた理由なのであった。そしてこの出来事を通してイスラエル人と異邦人の受ける祝福が逆転することをイエスは示された。→11~12

やがて真の神を信じる信仰を持った多くの異邦人たちが東からも西からもすなわち世界中から来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブといったイスラエル民族の祖先と共に食卓に着き神の豊かな祝福にあずかる。しかし、御国の子ら、神の選びの民であるイスラエルは外の暗闇に放り出される、すなわち滅びに行くことになるというのである。

神は変心されたのであろうか。そうではない。変心したのはイスラエルであった。アブラハム以来の神の選びの民であるというイスラエル民族の自覚は時代とともに高慢な選民意識へと変わり、ついには神の救いと祝福から一時的にもせよ、退けられることになったのである。そして異邦人は百人隊長に見られるように血筋ではなく、その信仰によって救いに入れられることになる。

ローマ11:20には野生のオリーブの枝が本来のオリーブの枝に接ぎ木される例が記されている。→「彼ら(イスラエル人)は不信仰によって折られましたが、あなた(異邦人)は信仰によって立っています」とあるがまさにその通りのことが神の救いの歴史の中で起こるのである。

[13]「それからイエスは百人隊長に言われた。『行きなさい。あなたの信じたとおりになるように』すると、ちょうどそのとき、そのしもべは癒された」

私たちもこの百人隊長と同じ異邦人であり神の選びと祝福の外にある者であった。しかし、今日の聖書の箇所と同じように、ただ神の御子イエスを

救い主と信じる信仰のみによって救われ、天の御国に入る者、神の祝福を受け継ぐ者とされたのであった。

私たちは不信仰ではなく、この百人隊長のように心からの信頼と信仰をもってイエス・キリストにより頼み、「あなたの信じたとおりになるように」と神のみこころが私たちの人生においてなるようにと願いつつ信仰の歩みを続けていくことが大切である。